

## 第2章

### 大口中学校の“うわさ話”に答えます。

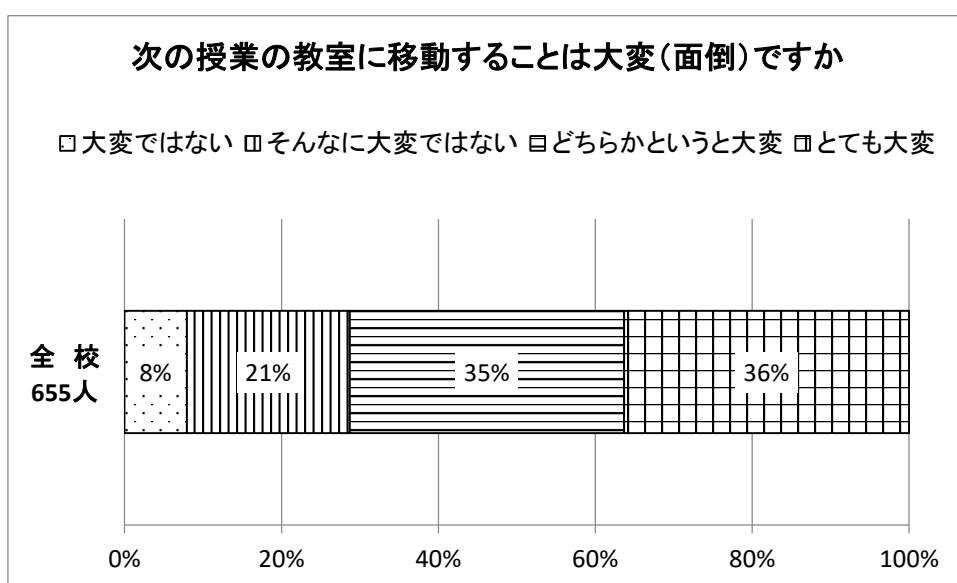
大口中学校は、どのようなねらいをもって、教科センター方式やブロック活動に取り組んでいるのでしょうか。

第2章では“うわさ話”と称する問いに答える形式で、大口中学校の現状について説明していきます。

## I 生活編

### 1 教室移動で子どもが疲れてしまうって話を聞くけど、どうなの？

「疲れる」あるいは、「疲れない」という判断は主観的なものであり、第三者が推測して述べるのは適切ではないと考えます。そこで、全生徒へのアンケート調査を行いました。結果として、「どちらかという大変」「とても大変」と答える生徒はおよそ7割いることが分かりました。



この結果は、想定していた以上に「大変だ」と感じている生徒が多いものでした。教室移動に伴う負担が、得られる効果に見合うものにしていく必要があります。

2 教室移動で授業に遅れてくる子がいるって話だけど。

問いにあるような事実は、ありません。

1 年生の入学当初は、教室の場所が分からず困ったこともあるようです。しかし、場所が分からなくて困るという問題は、しばらくするとなくなっていく、と観察しています。

また、「意図的に授業に遅れる」という生徒はおりません。

3 移動するのに時間がかかるのでトイレにも行けないっていうけど。

授業に遅れないようにするため、トイレを我慢することがあったという話を聞いています。

こうした生徒の、学校生活に適應しようとする意欲は認めるべきものでありますが、トイレに行っていて仕方がなく遅れるのと、意図的に授業開始に遅れることは根本的に違うことを伝えて諭したことがあります。

#### 4 先輩が怖くて、トイレに入れないんだけど。

教科センター方式のもと、全校生徒が教室移動しようとする際に突き当たる課題は、いわゆる「学年の壁」という言葉が表す従来の学校運営の考え方です。従来の学校運営は、「学級王国」という言葉があるように、学級や学年集団の中で「閉じられている」ことが多くありました。つまり、教師は自分の学級や学年がよければよい。異学年との交流はあまりなく、ともすれば規律がとれていない、いわゆる荒れた学年には自分の学年の生徒には近づかせない、という考え方もあったりもしました。使うトイレも学年ごとに指定されているほどでした。

しかしながら、教科センター方式では、教室移動で違う学年と接触があることは避けて通れません。ならば、はじめから「学年の壁」を取り除き、日常生活から、学年間を交流させてしまおう、ひいては、異学年が交流することを前提とする日常生活の中で、共に生きる「共生」の精神をもった生徒を育てよう、そのような発想から異学年交流という理念を抱き、学校経営の特色の一つとして位置づけました。こうした考え方から、大口中学校では、単に「教科センター方式」と呼ぶのではなく、そのシステムを「異学年交流型教科センター方式」と呼んでいるわけです。

異学年交流の教育を進めることによって、標記の問いを感じる生徒がいるならばその子の気持ちに耳を傾け、その子が先輩がいても大丈夫だなと思ってもらえるような働きかけをしていきたいと思います。

## 5 教室移動で一人ぼっちになって寂しがっている子がいるって聞くけど。

中学生の子にとって、「友達と一緒にいる」という感覚は大きな意味を与えるものだとして理解します。教科センター方式の特徴の一つは、生徒が授業ごとに教室を移動するという点です。この悩みは教科センター方式から生じる悩みであるとも言えます。ただ、教科センター方式で無い学校においても、ホームルーム以外で行う5つの教科（理科、音楽、美術、技術・家庭、体育）では、特別教室等への移動を要しますので、必ずしも教科センター方式だからというわけではないと言えます。

下表は、大口中学校が採用する「教科センター方式」の伴う教室移動の行為によって生じる長所と短所をまとめたものです。

表：教科センター方式の長所と短所

長所	短所
<ul style="list-style-type: none"><li>・ 自ら当該教室に移動することで、能動的に学習に向かう意識が芽生える。</li><li>・ 教科の学習に適した環境で学習ができる。</li><li>・ 生活拠点と学習拠点が異なるので、学習時間と休み時間の意識の切り替えができる。</li><li>・ 教室移動により、気分転換ができる。</li><li>・ より幅広い相手との交流が生まれやすい。</li><li>・ 他者との関係距離や居場所選択が、一人一人自由にできる。</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 一般的な中学校より教室移動が多くあるため、休み時間に余裕がない。</li><li>・ 1時間目の教室移動時間を生み出すために、補充学習のための朝学習の時間が生み出せなくなる。</li><li>・ 同一空間に長く在留しないために、ホームルーム教室に対する帰属意識が生まれにくい。</li><li>・ 学級集団としての居場所を定めにくく、学級内の人間関係を構築しにくい。</li></ul>

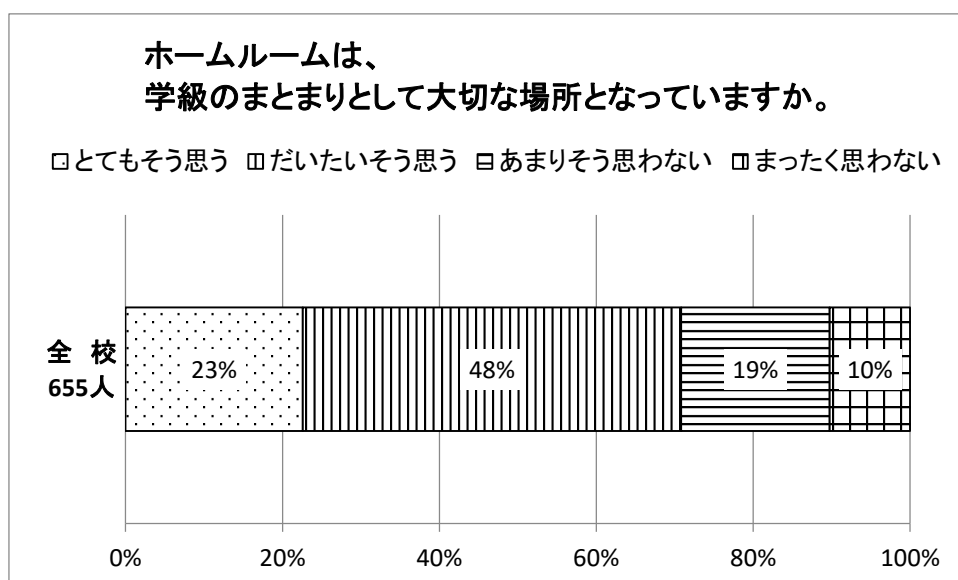
長所と短所は表裏一体の関係にありますので、教室移動に伴って、幅広い相手との交流が生まれたり、他者との関係距離や居場所選択が自由にできたりする側面も指摘することができます。

## 6 自分たちの教室がないので、学級としての一体感がわかないんだけど。

「自分たちの教室」とは、ホームルームを示していますが、大口中学校にも、ホームルームはきちんと存在します。生徒は登校するとホームルームに入室し、朝の会から一日の学校生活をスタートします。給食を学級の仲間とホームルームで食べ、夕方には帰りの会をして一日を終えます。そして、道徳の授業や学級活動も、ホームルームで行われます。

ただ、授業は、全教科において教科教室で行われるため、授業時間になると「自分たちの教室」から出ていくこととなります。その一方で、ホームルームの教室が、国語、数学、社会、英語の教科用教室と兼ねているため、「自分たちの教室」に他のクラスの生徒が学習のために出入りすることが生じます。

このような状況から、標記の問いが生まれてくるものと推測しますが、下記のグラフは、全校生徒を対象にしたアンケート結果です。



アンケート結果からは、教科教室と兼用するホームルームではありますが、多くの生徒にとって、大切な場所として認知されていることが分かります。教科センター方式だから、「自分たちの教室がない」と生徒に思わせない学級経営をより推進していくことが求められます。

7 自分の机がないので、居場所がない。それが不登校の多い原因じゃないかな。

「自分の机」＝「居場所」であるという感覚も経験則として理解できます。確かに1時間目の授業から4時間目の授業が行われている間、ホームルームの「自分の机」は、第三者が使用していて、「自分」が使うことはできません。しかしながら、「居場所」が「自分の机」だけであるとしたら、これも不自然なことではないでしょうか。

大口中学校では、様々な「居場所」が仕掛けられています。情報スペースである教科ラウンジでは、多様な情報に触れたり、教科教員室に面しているので授業に関する質問を教員に投げかけたりすることが容易です。また校舎の各所にはテーブルやベンチが設置されており、図書室はすべての休み時間が開館されています。こうした多様な居場所の提供により、より幅広い相手との交流が生まれたり、他者との関係距離を一人ひとりが自由に選択できたりするという見方をしたとき、教科センター方式の利点を明示できるのではないのでしょうか。

一方で、「不登校が多い原因」は、「自分の机がない」こととは分けて考える必要があると考えます。また、不登校生徒が「多い」という指摘ではありますが、根拠をもって述べる必要がありますので、本報告書では回答を控えさせていただきます。



8 教師が教科教員室に分かれているので、教員間の連携が不足しているのでは。

「教科教員室」の存在は、教科センター方式の肝になる部分です。なぜならば、「教科センター方式」とは、教科の指導を担当教員がチームとなって組織的に行っていくことが重要だからです。その中核的場所（センター）として教科教員室があり、ここを起点にして教科経営が行われます。

ですので、大口中学校では生徒が在籍している間は、教員には教科教員室を中心にして執務をするよう申し合わせています。一方で一般的な学校では、教科教員室そのものがないため、職員室で執務が行われます。そのため、大口中学校では、教科の教員間の連携は高まるけれども、それ以外の教員との連携が不足するとないかとの心配が生じるものと思われる。

こうした中、大口中学校では、「全教職員で全生徒を育てる」という経営方針を立てています。従来型の学年経営を中心とする学校運営では、他学年のやり方には干渉しない、という慣習があったものでした。これを打破しようとして「異学年交流型教科センター方式」に取り組んできています。

「教科教員室に分かれている」とこと、「教員間の連携が不足している」ことは、関係ありません。こうした条件の中で、どのようにしたら教員間の連携が円滑になされるかは、学校現場で連綿と模索していくことになると思います。

(本ページ余白)